「住吉祭礼図」が描く堺はいつの時代の景観か （最終版）

メモ）鉄本　2023.09.05

「住吉祭礼図」が描く堺の景観について、各氏から次のような見解が示されている。

①慶長期後半説（1607～1615） ⇒ 永井規男氏（建築史学　関西大学名誉教授）
谷直樹氏（建築史学　大阪くらしの今昔館館長）

尚、上記の両氏は元和以降の景観の可能性を否定はしていない。

②慶長・元和復興期説（1608～1617） ⇒ 知念理氏（大阪市立美術館学芸課長代理）

氏は住吉大社の神宮寺の塔が三重塔として描写されていることに着目し、復興が始まった気運の中で描かれたと推定する。

③「元和偃武」説（1615～1623） ⇒ 矢内一磨氏（堺市博物館　学芸員）

祭礼図右隻に描かれている人物が持っている軍配に着目し、そこに書かれている文字を「天下泰平」と読み取り、それを「元和偃武」を反映したものと解釈している。

1. 文献による住吉大社造営と堺復興の記録

住吉大社は、20年に一度、「式年造替遷宮」が行われ、永享6年（1434）までは確実に実施されてきた。しかし、応仁の乱など戦国の動乱のために造替遷宮は行われなくなってしまった。
室町幕府の力もなく社人の勧進を行う力もない状態で、住吉大社は荒廃状態にあった。この時、高野山に属す天野屋衆の僧である南室賢智坊が勧進を進め、永正14年（1517）に本殿の造営を完成させ遷宮を成し遂げた。永正17年（1520）には、前年に大風で倒れた大鳥居を修理、さらに、天文3年（1534）には大鳥居を造立させた。かくして天野屋衆の力により式年造替遷宮が再興された。

・天文11年（1542）　後奈良天皇の造替遷宮の綸旨　☜（『住吉松葉大記』）
実施されたかは不明だが天野屋衆の働きがあった可能性は否定できない。

・天正4年（1576）　織田信長による石山本願寺攻めの際、本願寺側の一揆による放火により
4つの神殿・幣殿（拝殿）、霊宝、客殿、4つの神輿など多数の施設が全焼。
☜（天正4年の『御府文書』）

・天正4年～文禄4年（1595）の間に、木食応其上人（真言宗の僧　1536～1608）によって、
本殿3棟が再建されたが、完全復興とはならず仮殿の状態であった。 ☜（『兼見卿記』）

右図は、旧円満院宸殿障壁画「住吉社頭図」（国立文化財機構所蔵）の一部分。この絵図には第二、第三、第四社殿に幣殿が描かれていない。この景観は、仮殿状態にあった文禄期（1592～95）頃のものと考えられる。

・慶長11年（1606）～慶長12年（1607）　豊臣秀頼の援助による造営　【第 38 回式年遷宮】
⇒ 慶長11年分：　西大門、南神館、神殿、高蔵、神輿、神馬屋の完成
⇒ 慶長12年分：　**2，3，4社の幣殿建立**　蓮池南楽屋、御旅所及び左右の御殿建立
西塔、東塔、三昧堂建立　**北、南、東の大鳥居を建立**　**西塔は修理**

その他、本社神域全体、神宮寺、海岸寺、諸堂塔を再建

☜（『住吉松葉大記』に所収の「津守家盛記」）

＊反橋の記載は見えず

・元和元年（1615）　「夏の陣」の時、大坂方の放火で神主居館等が焼け、四本殿も相当な被害
突然の雷雨により、本殿は焼失を免れた。

☜（『駿府記』、『住吉松葉大記』）

同年6月18日　復興の鍬入れ（風間六右衛門が地割奉行）　☜「金地院崇伝の書状」

・元和2年（1616）　妙国寺庫裏が復旧

・元和4年（1618）　住吉大社の造営遷宮、神宮寺、西大塔も再建。【第 39 回式年遷宮】
本殿は焼失を免れていたため、修復を行った程度と思われる。

風間六右衛門が恣意によって地割を行ったとされ、その責任をとって自刃。

・元和5年（1619）　南宗寺庫裏・開山堂・鐘楼等が復旧　以降、各寺院の造営が続く。

・明暦元年（1655）　住吉大社にて久々の式年遷宮が行われる。

遷宮は、4つの本社同時に行われ、大海神社はじめ摂末社、堺宿院御旅所、方違社等まで行われる規模の大きな造営、遷宮であった。

・元禄15年（1702）　**宝永6年（1709）の遷宮**に向けて住吉大社の建物の検分が行われ、そこには、奥天神（生根神社）、開口神社、方違神社等も本社に直属していることが記されている。

・寛政7年～8年（1795～1796）**「住吉名勝図会」、「摂津名所図会」**が刊行される。

以上から、近世初頭において住吉大社の景観が整備された時期は、次の2つの期間ということが推定できる。

①慶長12年（1607）～元和元年（1615）の時期

②元和4年（1618）以降の時期

2.「住吉名勝図会」などと「住吉祭礼図」に描かれている住吉大社の建築様式に着目

（1）2つの「図会」と「住吉祭礼図」の建造物比較

堺市博物館　館報1「中世堺の町なみについて」 永井規男/谷直樹を参考にして各図を比較する。

①幣殿（拝殿）の屋根の形状

「住吉祭礼図」 拝殿
（入母屋造平入り　柵垣なし）

「住吉名勝図会」 拝殿
（前流　中央に千鳥破風と唐破風　　現在はこの形）

【参考】　千鳥破風は、屋根の流れ面に起こした三角形の破風のことで、装飾、換気、採光等の目的で

用いられた。平安末期から採光・通気用出窓として造られ、南北朝時代以降には装飾性を高めた千鳥破風が始まった。国宝住吉神社本殿（山口・下関市　応安3年（1370）再建）は、千鳥破風採用の早期例である。

②大鳥居の描写

【文献・図会における記述・描写の比較】

	東大鳥居	西大鳥居	南大鳥居	北大鳥居	中鳥居
①津守家盛記（慶長期）	あり	あり	あり	あり	なし
②住吉祭礼図	枠外	あり	あり	あり	なし
③住吉名勝図会	あり	あり	枠外	あり	あり
④摂津名所図会	あり	枠外	あり	あり	あり

（注）　①は慶長11・12年（1606・7）刊行　　③は寛政7年（1795）刊行　　④は寛政8年（1796）刊行

「慶長十二年津守家盛記」の記述

①北、南、東の3つの大鳥居が慶長12年に建てられたこと、西大鳥居が修理されたことを記述。

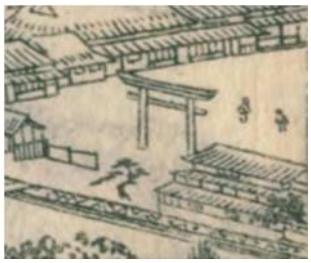
②中鳥居の記述はない。

【「住吉名勝図会」及び「摂津名所図会」に描写されている大鳥居図（切抜き）】

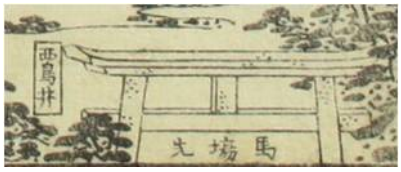
北大鳥居（大海神社側）

南大鳥居（御田付近）

東大鳥居



西大鳥居（反橋に向かう側）



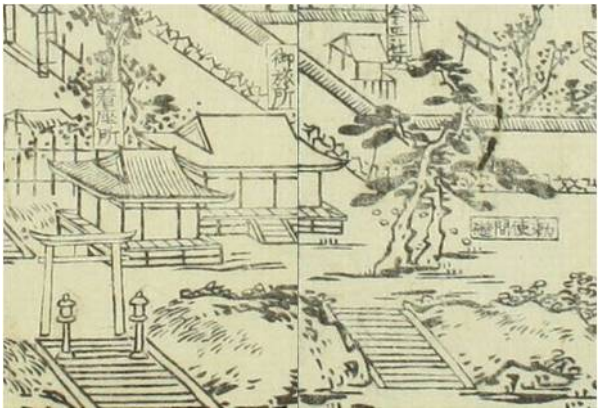
中鳥居（反橋付近）

③御旅所の描写

「津守家盛記」には、慶長12年に御旅所の左右に「着座所」が建てられたという記述がある。

・「住吉名勝図会」には、
　左側の「着座所」のみ描写。
　右側は「勅使間跡」とある。

・「住吉祭礼図」には御旅所の描写はない。
　これは、祭礼図の画家による省略と考えられるが、慶長12年（1607）以前の景観と捉えることも考えられる。



④鉾（ほこ）社の向き

住吉祭礼図の鉾社
（東西方向に描写）

住吉名勝図会の鉾社
（南北方向に描写）

現在の鉾社
（南北方向に設置）

【参考】 鉾社は本宮の前方左、楯社は本宮の前方右に配置され、本宮を守護する武神である。鉾社の祭神は経津主命（ふつぬしのみこと)で、本社は香取神宮。楯社の祭神は武甕槌命（たけみかづちのみこと)で、本社は鹿島神宮。

⑤南大鳥居脇の2つの小社

「住吉名勝図会」、「摂津名所図会」には、「住吉祭礼図」に描かれている2つの社に相当する社の描写はない。

3. 女性の服飾に着目

（1）女性の髪型

①祭礼図の殆どの女性は、垂髪又は根結いの垂髪であり、これは平安時代から安土桃山時代の髪型である。

②右隻に描かれている北之橋に立つ 2 人の女性の髪型が、唐輪髷又は兵庫髷である。この髪型は室町末期から桃山時代にかけて兵庫の遊女が男髷を模倣して結い始めたものである。
兵庫髷が一般化したのは、寛永年間（1624～1644）で元禄（1688～1704）頃には廃れた。

出典: HP ポーラ文化研究所「日本髪」

(2)女性の衣装(**被衣**)に着目

被衣(かずき/かつぎ)姿の女性が4人描かれている。女子が外出の際、頭からかぶった衣服のことで、室町期以降は小袖形式になった。
室町時代から江戸時代初期の被衣には、白無地や、白地に青系統の色で雁木形文様を施したものが多い。前者は白の練緯(ねりぬき;平織の絹)で、後者は藍染めの麻である。このような特徴は慶長期(1596～1614)頃に顕著となった。元禄期頃になると、頭頂部に大きな菊や梅などの花紋を施した大紋のものが表れる。
祭礼図に描かれている女性の被衣の文様を見る限り慶長期のものと推定できる。

(3)傘に着目

傘は仏具の天蓋を起源として、平安時代に和紙と竹細工を使った軸を持ち開閉できる傘が作られる。
傘の機能は、威信具⇒日傘⇒風流傘⇒雨傘(番傘)と変化してきた。祭礼図には、いくつかの傘を差した描写がある。いずれの傘も「**ろくろ式**」(開閉が可能な傘)である。
ろくろ式傘は、文禄3年(1594)に納屋助左衛門によって輸入されたとされている。

4. 建物の構造に着目

(1)屋根葺きの様子

屋根葺きの種類	住吉祭礼図屏風				京都(舟木本洛中洛外図左隻)	(比率)
	住吉	安立	堺	(比率)		
草葺家	17	4	0		0	
石置板葺家	0	2	7	(9. 5)	35	(27. 6)
板葺家	0	0	0		15	(11. 8)
柿葺家	1	7	51	(68. 9)	59	(46. 5)
瓦葺家	0	0	9	(12. 1)	10	(7. 9)
土蔵	2	0	7	(9. 5)	8	(6. 2)
計	20	13	74	(100)	127	(100)

＊ 堺市博物館　館報1 「中世堺の町なみについて」(永井規男/谷直樹)の表1、表2から転載

屏風絵には画家の恣意が入るので、これから得られる数値情報を客観的ものとすることは出来ないが、当時のそれぞれの町の景観を知る手がかりにはなるものと考える。

(注目点) ①堺には草葺家が1軒もない。
②瓦葺家の割合が京都より多く、当時の堺の経済的先進性を示している。

(2)厨子(つし)二階と卯建(うだつ)

厨子二階及び卯建について、絵図上で明確に見える範囲のものを数えると右の表のようになる。

	住吉祭礼図(右隻の堺エリアに限定)	京都(舟木本洛中洛外図左隻)
厨子二階	11(14. 9)	25(19. 7)
卯建	10(13. 5)	19(15. 0)
町屋全体数	74(100)	127(100)

(3)「露地口」又は「中潜り(なかくぐり)」らしき造作

「住吉祭礼図」の右隻の第4扇部分には、小窓から顔を覗かせている人物が描かれている。(右図参照)

茶の湯の空間は、茶室だけでなく、露地と呼ばれる茶庭と一体となって構成されている。「路次(露地)」という言葉が室町時代に使われ始める。

茶室に付随する空間として、最初は**「坪之内」**と呼ばれ、

『山上宗二記』には「面坪ノ内」や「脇ノ坪ノ内」といった表現が出てくる。

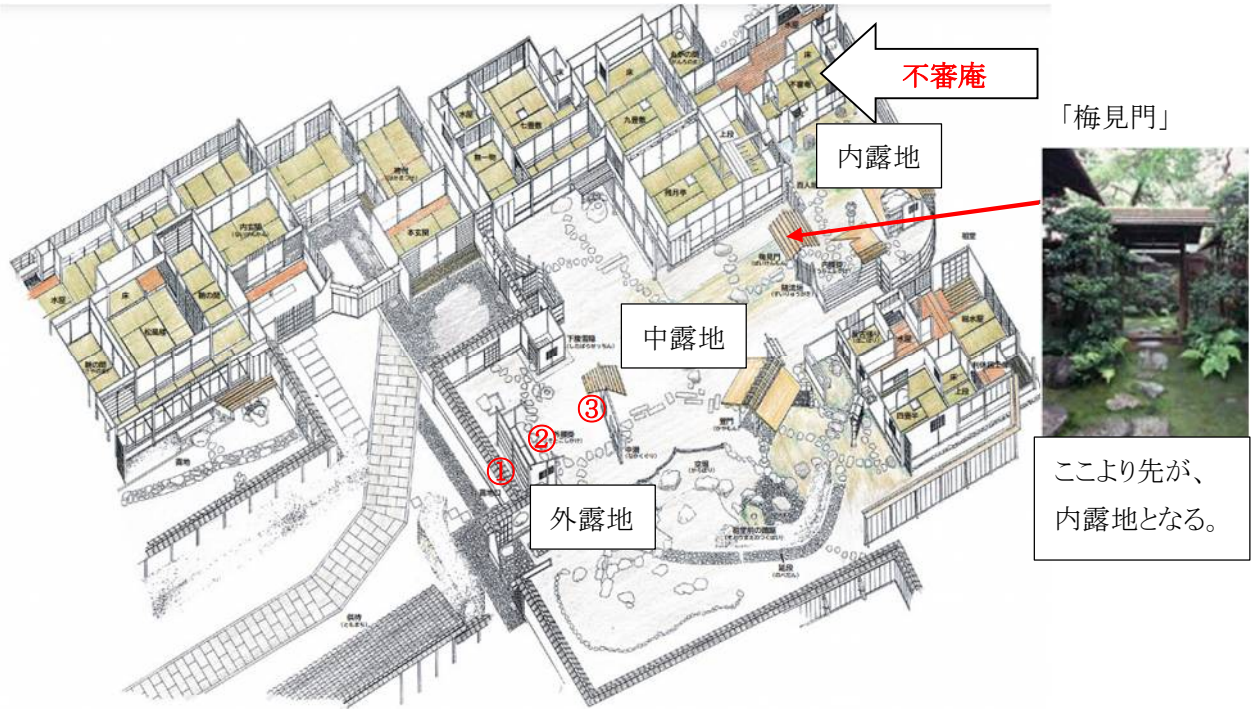
千利休(1522～1591)は露地を**「浮世の外ノ道」**と表現した。

「露地」は、「三界の火宅を出で露地に坐す」という仏教用語から採った言葉である。

露地は、単に茶室へ通るための道という物理的意味だけではなく、その空間が世俗を断ち聖化するための準備を行う場所であることを意味している。

表千家の HP では、「不審庵」までの「露地」を、以下のように紹介している。

「不審庵」全体図　　表千家の HP より抜粋:　表千家不審菴:茶室と露地 (omotesenke.jp)



① **「露地口」**

② 「外掛け」

③「**中門**」: 各露地の出入り口に設けられた門。亭主はここで客を迎える。この先が中露地、手前が外露地となる。「**中潜り**」が刳り抜かれており、ここを潜る。「躙り口」と同じ意味がある。

「潜り」を閉めた状態

「潜り」を開けた状態

「不審庵」の「露地口」や「中門・中潜り」に照らし、改めて祭礼図右扇の第4扇部分を見ると、「中門」に似た潜り戸の先は、家屋に挟まれた細い路地となっており、その奥には茶室があることを想像させる。祭礼図の潜り戸は一般道路に接しており、「外露地」と「内露地」に分ける「中門」が置かれている位置とは異なるが、俗世界と聖なる世界を分ける役割をなす「中門」(或いは「露地口」)のはしりと解釈することができる。

5.「住吉祭礼図」に描かれている「天下泰平」の解釈

学芸員矢内一磨氏の指摘によると「住吉祭礼図」に「天下泰平」の文字が書かれている軍配が描かれています。そこで、「天下泰平」という言葉の語源と、日本国内でのその言葉の拡がりの歴史を調べた。

「天下泰平」の意味は、何事もなく平穏無事という意味があり、祭礼図が「夏越大祓」の神事を描いていることに照らし合わせると、堺の町に災いがなく平穏無事であることを言祝ぎ、「天下泰平」を描いていると考えられる。

一方、祭礼図が「大坂の陣」の後の「元和偃武」の様子を描いたものとすれば、「天下泰平」は戦国の世が終わり、天下がよく治まって堺の町も平和な時代となったことを象徴するものと言える。

参考にした文献は次の通り。

・『四字熟語の読本』 尚学図書・言語研究所／編　小学館　1988

・『日本国語大辞典　第 9 巻』 小学館国語辞典編集部／編　小学館　2001

・『角川　古語大辞典　第 4 巻』 中村 幸彦　岡見 正雄　阪倉 篤義／編　角川書店　1994

・『時代別国語大辞典　室町時代編4』　三省堂　2000

「天下泰平」の字義 『日本国語大辞典　第 9 巻』

①天下がよく治まって平和なこと　②平穏無事なこと　③何事もないようにのんびりしていること

「天下泰平」の用法について、その変遷をみると、上記の定義の①の用法から②、③の用法に変化してきていることが判る。国家レベルの安泰から身の回りの卑近な安泰を表すものに広がっている。

以下に、「天下泰平(太平)」の言葉が出現する文献、史料を列挙する。

(1)語源 『礼記(らいき)　仲尼燕居』: ＝孔子と弟子との問答　中国・春秋時代(紀元前500年頃)

「言而履之礼也、行而楽之楽也、君子力此二者、以南面而立、夫是以天下太平也」

(2)『続日本紀』 第 46 代孝謙天皇　天平勝宝9年(757)

「天皇寝殿承塵之裏、天下太平四字自生焉」

意味：「内裏にはすずろに、**天下太平**と云う文いで来り」（愚管抄）

> 孝謙天皇の御世に、「天下太平」の四字が内裏に現れたので、吉兆として年号を「天平宝字」と改元した。以後、縁起の良いものとして、祝言にも「**天下泰平**　国土安穏　御代長久」と用いられる。

(3)「謡曲・田村」　京都・清水寺縁起の謡曲　作者は世阿弥(1363?～1443?)という説があるが不詳。

後シテが、「天下泰平、天下泰平ナルノ義ナリ」と謡う。

> 京都・清水寺を訪れた僧の前に、坂上田村麿の化身である童子が表れる。坂上田村麿の尊霊は、いにしえ東夷を平定し、**天下泰平**の世を創り出したのも、全てはこの寺の功徳ゆえであると、彼はその昔物語を語り始める。

(4)『文明本節用集(ぶんめいほんせつようしゅう)』　室町時代中期の漢字熟語集

「天下太平　泰平同」と所収されている。

(5)『虎明本狂言集』 鍋八撥　大蔵虎明作

(江戸時代初期の狂言師　大蔵流宗家13世　1597年～1662年)

「誠に天下泰平国土安穏、上下ばんみむんめでたい折なれば～」

> 代官が新たに市を開設するにあたって高札を掲げ、最初に到着した者に諸税免税の特権を与えるとした。鼓売りと鍋売りが先着争いを起こし、代官が仲裁に入る。能狂言の舞を二人で舞って勝負を着けることになった。鼓売りが鼓を打って機敏に舞うのに対して、鍋売りは鍋を打って囃すがうまく行かず鍋を割ってしまう。鍋売りは、「数が多くなってめでたい」といって終曲。

(6)『浮世草子・世間胸算用巻5』の4　長久の江戸棚　(井原西鶴作　1692年)

「天下泰平　国土万人江戸商ひを心がけ　其道其道の棚出して～」

(7)『太郎坊』（幸田露伴作　1900年)

「アア、酒も好い、下物も好い、お酌はお前だし、天下泰平という訳だな」

【参考文献】

・『(堺市博物館) 館報1』「中世堺の町なみについて」 関西大学教授　永井紀男　1982
堺市博物館主任研究員　谷　直樹

・『堺市博物館館報　第27号』「堺の『茶の湯』に関する若干の検討」　白神典之　2007

・特別展図録 「堺復興」 堺市博物館　2015

・HP　住吉大社　住吉大社 (sumiyoshitaisha.net)　・HP ポーラ文化研究所「日本髪」

・HP　表千家不審菴

・『住吉名勝図会』（寛政7年)、『摂津名所図会』(寛政8年)

・『住吉大社史』 住吉大社奉賛会　1983

・『住吉松葉大記』 土師惟朝編輯　加地宏江/中村直人/野高宏之　大阪史料調査会　2000